

平成27年度 副知事と県民の意見交換会概要

テーマ：若者が考える秋田の地域づくり

日時：平成27年7月22日（水）16：00～18：30

場所：県庁議会棟特別会議室

(副知事あいさつ)

学生の皆さんだけが集まったの会議はなかなかない機会なので、楽しみである。様々な大学、様々な出身地の方がおられると思う。大学で地域で色々な活動を熱心に行っている方々と聞いているので、そうした中で感じている事を聞かせていただければと思う。よろしく願います。

【参加者自己紹介】

(A氏)

東京生まれ、東京育ちだが、母が潟上市天王出身、父は青森県出身で東北に縁がある。

(B氏)

東京出身。HAPPY PEOPLE in Akitaで、留学生や県外出身者を県内各地にバスツアーで連れて行くサークルに入っている。県外出身者の目線で意見を出したい。

(C氏)

宮崎県出身。地元の延岡市が秋田市と似ている。高校の時から、地元のシャッター街の多さ等が課題だと思っており、大学生になったらそれらの課題解決のための活動をしたいと思っていた。

(D氏)

横手市出身。19年間秋田に住んで、学生として地域に貢献したいと考えていたので、アトムに入会して、地域の現状を知り、考える機会となった。知恵を振り絞ってディスカッションしたい。

(E氏)

秋田市出身。市内から離れた事がなく、高校までは秋田県に興味がなかった。アトムに入会して秋田市以外の町を見ているうち、自分は狭い世界にいて、知らない事がたくさんあると感動した。他の学生にも知らせたいと思う。

(F氏)

岩手生まれだが、幼稚園から秋田。中学、高校で秋田県について学んで興味を持ち、課題が多いのもわかった。一人では出来ない事も団体に入る事で出来る。こうしなきゃではなく、こうしたらいいんじゃないかと思って活動している。

(G氏)

群馬県出身。アーク代表を引き継いだばかり。前代表の思い、秋田の現状、大学生のやれる事の三つをうまくつないでいきたい。

(H氏)

静岡県出身。高麗大学留学中。秋田で就職しようと思ひ、働き方を考えている。HAPPY PEOPLE in Akitaにも入っている。国際教養大学は県外出身者、留学生が多いが、秋田では足、車がないと不便である。バスツアーを通じて秋田の資源をみつけてほしいと思っている。県内各地を回り、観光地とのコミュニケーションは出来たが、県民とのコミュニケーションは出来ていないので、両方コミットしたい。これまで24市町村を回り、各地域に多様な文化がある事がわかった。秋田に骨を埋めるつもりである。

(I氏)

能代市二ツ井出身。アーク創設者。若者がいなくなる現状、消滅可能性都市になるかもしれないことに不安がある。県内に残る自分としては、学生の推進力を使ってなんとかしたいと思っている。アークの強みは自治体、地域と寄り添える事。地域とのイベントは打ち上げ花火ではなく、地元の人々の感性や気持ちを大切に継続させたい。設立3年目で会員140人。数の多少でなく秋田を活性化させたい意思がこれだけ集まったという事と思っているので嬉しい。

※同会場にて、学生団体による活動の発表を見学。

(アーク)

自分の故郷がなくなるかもしれない不安感、危機感で団体を立ち上げた。秋田だけでなく、日本全体で危機感を持たなくてはならないと思う。人口が流出する秋田だが、入ってくる人もいる、それは学生。学生の居場所を作りたい事と、学生が集まってコミュニティを作る事で大きな力になるのではないかと考えている。学生が地域に赴き、地域とそこに住む人々との交流を通じ、地域を活性化する事を目的とする。大学での座学は盲点がある。人口が減少する秋田だから、現地で自分で問題点を発見し、その解決にいかにか自分の専門性を活かせるか、そういうアプローチの仕方を考える。学生は地域に発想、元気を与える事が出来る。反対に、地域は学生に交流や体験を提供出来る。アークは学生と地域の調整役、架け橋の役目がある。

現在、全県七カ所のエリアで活動している。藤里プロジェクトは、フィールドワークで観光ガイドブックの作成、地域の人達と共に防災ワークショップの実施、祭りの参加。檜山プロジェクトも同様。大阿仁は遠野のNPOと協働で街歩き等。安全寺の地域資源である棚田、このお米をいかに消費者に届けるか取り組んだ。聞き書きで、文化の保存、伝承のデータ化をしている。地域住民と一緒にワークショップを行い、課題の発見とその解決に取り組んでいる。

これからは、まずは国内外の団体の地域派遣の調整をやりたい。去年は日米学生会議の受け入れを行った。二つ目は、全県規模での地域間交流を促進していきたい。今活動している点を線で結んで交流を促進する。また、聞き書きによる地域の情報、地域の文化資料を作って保存していければと考えている。現役メンバーの他OB会もあるので、地域活性化に取り組む人達のネットワークを全国に広げていきたい。現在会員140人、3年間で1,200人の学生が地域で活動してきた。今までは地盤整備だったが、これからは全県を巻き込んだ地域活性化システムの構築を行いたいと思っているので、応援をよろしく

お願いします。

(アトム)

アトムは「あきた、つながり、みらい、うきうき！」の頭文字。「つながり行動することによって秋田の未来をうきうきするような楽しいものにしていこう！」というのがコンセプトである。

主な活動として、あきた学生ティータイム。これは学生と地域の方々を招いての交流会、意見交換会。ツーリズム班によるグリーンツーリズム。東由利レンコン畑、地元の人と交流し、秋田を知って好きになってもらうもの。今はまちづくり班がメインの活動。秋田商工会議所と協働で、秋田駅周辺のマップ作成を行った。

2011年設立。設立者の国際教養大生が、地域の祭りに参加した時、翌年からは人がいなくて、継続出来ないと聞き、自分達が何か出来ないかと思い設立した。

自分達で製作したロケ動画は、ただ見るのではなく、記録として残して発信していこうとしている。町あるきマップの「あきたまちぐるーと」は、駅周辺のスポットやお店を自分達で取材して書き、「街に突っ込みをいれていこう」をコンセプトに作り、スマホアプリにもなった。

「田んぼと油田」は、秋大授業の一環。留学生が豊川油田に行って地域の人にインタビューしたものを撮影、製作を行った。大学の配慮もあって、自分達のいい経験にもなった。

また、今年3月末にアルヴェで「秋田サークル見本市」を行った。県内学生団体サークルの見本市として展示等を行った。皆に来てもらって活動を知ってもらうというもの。

今後は、交流会の実施、情報発信、観光ツアーを三本柱として、「もっと秋田でつながる、みつける、発信する」で、今後の活動を行っていききたい。学生の交流はもちろん、異世代交流をするために、既存の企画だけでなく広範囲の交流会を行いたい。若者の強みとして、SNSや動画等ネットの情報発信が得意なので、積極的にやっていこうと思っている。活動4年目で代も替わり、やっていきたい事がたくさんあるので、これからも学生の自由な発想でやっていききたいと思っている。これからも見守ってほしい。

【意見交換】

(A氏)

こういった活動の資金は、どこから捻出しているのか。

(I氏)

自治体と活動しているので、自治体に出してもらっている。補助金は使ってないが、自分達の出費もない。本当に要望があるところだけを選んでやっている。最近多い「ボランティアに来て」という依頼は、自分達はボランティア団体ではないので断っている。長いスタンスでやれる活動を行っているので、1年で終わるものはやらない。お金をもらうのは責任も伴うので、自治体の会議にも参加している。全ての地区で、1年目からそういう形で活動している。

(司会)

自治体というのは自治会、町内会の事か。

(I氏)

自治会である。学生が地域で活動するのに課題となるのは交通費。それを解決すれば学生はもっと活動出来ると考え、交通費も出してもらっている。自家用車やNPO公用車等、送迎をしてもらう事もあるし、宿泊費を出してもらう事もある。自治会の負担だけだと大きすぎるので、藤里と檜山は大学の学生自主プロジェクトとして文科省予算をもらって運用している。

(副知事)

町内会、自治会、集落だと結構な負担でないか。市町村ならお金出せそうだが。

(I氏)

要望いただいているのは小さな地域である。小さい地区だと動きやすい利点もある。

(E氏)

自分達は、基本実費である。商工会議所の予算でマップを作ったり、秋大の予算で田んぼの事業を行った。サークル見本市では、東京の学生ボランティアセンターにプレゼンに行って15万の助成金を初めてもらった。昨年からは、そういう運用もしていこうという動きになっている。

(副知事)

アークは140人もの会員がいるのは凄い事だ。特に、聞き書きは大切な事なのでありがたいと思う。地域の生活習慣、風景、風俗。我々の世代は農作業風景等記憶しているが、こういうのを聞き書きで残してほしい。

(I氏)

数ではなく質だと思っている。毎週のように何らかのイベントを行い、毎回5人程度は活動している。聞き書きは、地域の人は孫世代の自分達に熱心に話してくれる。昔の事に関心持つのは嬉しい事だと話してくれる。地域の足跡を記録するのは大切だと思い、主力事業として取り組んでいる。

(副知事)

行政がやると構えられる。また、地元に住んでいると胸襟を開きにくい。若い皆さんが外から興味深く聞くと話しやすいのだと思う。凄く良い取組だと感心した。是非続けて頑張してほしい。

(司会)

その聞き書きは、どういう形で取りまとめて発信をしていく予定なのか。

(I氏)

発信の仕方が難しい。インタビューした人の人生、足跡を一冊にまとめるものであるが、個人的な内容もあり、秘密は外に出せない。将来は地域史のような形で出版出来ればと考えている。

(副知事)

聞き書きは集約して精力的に行ってほしい。アトムさんのお祭り支援。残したい祭りや伝統行事、全国的に集客の多い祭りもあるが、それぞれの町内でやっている小さな行事を残したいのだが、支える人がいない。それを皆さんが支援するのはありがたい。

(A氏)

高校生の頃、震災で引き手がなくなった祭りの神輿を支援するためにバスツアーで被災地へ行った。地元の人と直接交流し、リピーターを増やしていくのが大切である。人口減少対策は、子供を増やすよりも、学生、県外の若い人を定着させるのが現実的だと思う。祭りを通じて行く楽しみを作り、地域を好きになって住んでもらうと若年人口が増える。

(E氏)

祭りは、人に来てほしいものもあるが、その地域のお祭りだから来てほしくない人もいると思う。それには情報が大切。祭りについて困っているから来てほしいが、体制が整っていない所もある。それには、こちらからアプローチして情報をもらう事が重要かと思う。積極性は大事だが「若者だから手伝ってやる」と、ずけずけと行くのでは駄目だと考えている。

(A氏)

自分が復興支援の祭り活動に行った時も、情報を得て地元の人と信頼関係を築くのが大事だと感じた。

(副知事)

アークさんの七つの地域での活動。最初はどうだったか。

(I氏)

最初は、自分がこういう事をしたいというのを、人づてで地域に広げてもらった。先ほどの話だが、学生が来ると言う事に対して、地域全体が賛成と言う訳ではないのは事実としてある。だが、信頼関係さえ築けば受け入れてくれると思う。地域が受け入れてくれると、県外の学生も秋田好きになったと言ってくれる。それが増えていければと思う。

(A氏)

若年人口が減っている対策としては、学生にいかにか秋田を好きになってもらうかだと思う。それにはまず地域について知ってもらう事が必要だが、学生にとっては交通費が1番痛い。祭りはHAPPY PEOPLEでバスツアーをやっているが、それでも参加費はかかる。直接的に祭りに参加できる枠組みが出来れば、学生が地元の文化に触れる機会が増えて、秋田が好きになる、秋田に住んでくれる事につながるのではないかと思う。

(司会)

昨年の知事との意見交換会でも交通費の事は出ており、今年度秋田地域振興局で予算を取った。学生団体と地域団体のコーディネート、情報交換会を行い、マッチングが成

立した所には、県と公立4大学がお金を出し合って、交通費を支援することとしている。

(E氏)

最新情報として、自分達は、鳥海町のサークル山鳩さんと話を進めており、19日に一回目として行ってきたばかりである。これから書類を作ってお金をもらい、今後何回か行く予定である。

(司会)

振興局では、こうした仕組に取り組み始めている。これには交通費だけでなく、必要な経費は出していく。県と公立4大学で協議会を作り、学生の活動をバックアップしている。

(A氏)

アトムさんがやっている様に、他の団体も所属する学生が実費を出さずにイベントに参加できるという事か。

(司会)

全く負担がないと言う訳ではない。一定の限度の中で支援をしようという体制が、今年度から始まったというもの。

(E氏)

「やんぐびじょん」のお見合いは、学生も楽しみにして行ったのだが、それよりも地域団体の熱気が凄く、押しやアピールが強くて驚いた。地域の人達は学生と関わりたいのだと再度実感した。

(副知事)

Hさんは自己紹介で、東成瀬村を除いて24市町村を回ったのと言っていたが凄い事だ。色々な地域を回ってどんな感想を持ったか。

(H氏)

日本の他の地域は均一化された社会だと思っていたが、秋田は他の県と違う文化が残っている。秋田県の中でも市町村ごと、その中でも地域ごとに全く違う文化があると感じた。人口減少する中、日本は一つの社会になるのではと心配である。秋田の多様性を守りたい、それを世界に発信出来ればと考えている。

先ほど交通費の話が出ていたが、地域の祭りや市町村プロジェクトに学生が参加する場合、秋田県と市町村、バス会社等が出し合って、学生の活動に支援する施策があればいいと思う。プロジェクト参加時に見せれば無料になるパス、半額でもいいので、そういう施策があれば学生は助かる。公共交通機関への支援は県や市町村だと思うので、お願いします。

(A氏)

全部だと凄いお金になると思うので、特定のイベント参加時に、バスを出すとか、割引になれば、学生が参加しやすくなるのではないか。

(副知事)

公共交通機関を利用するケースであれば、パスを配布するなど、県と市町村、大学、バス会社で相談して具体的な手立てを考えられそうである。公共交通機関の利用促進にもつながるので考えてみる。

(H氏)

24市町村回るために、JRとバス代に相当お金がかかったので、大変ありがたい。これまでは交通費がかかるので我慢していたが、その分を地域での買い物等に回す事も出来る。よろしく願います。

(B氏)

もっと秋田に来てもらう事を考えると、秋田は教育県のイメージが強いので、教育で売り出していけると思う。「秋田で子育てすると子供が賢く育つ」というのは、県の産業になるのではないか。国際教養大学には全国から学生が集まり、色んな所から来た人が秋田を知る環境にある。だが、国際教養大生は就職で地元に戻ったり、都会で就職する人が多いのが残念。

小中高で、国際教養大学の様に、全国から人を集められるようなレベルの学校があればいいのではないか。偏差値だけでなく、特色のある学校があれば凄く強いと思う。例えば、農業に特化した学校、農家に下宿して、地域密着型。そこを卒業し、学んだ知識で秋田に就職できる未来があるのであれば秋田に住み続けたいと思うのではないか。

(E氏)

Bさんは県外出身者の目線の意見だが、反対に自分はずっと秋田市内で生まれ育った。秋田市内の中高生は秋田の事をあまり好きではない。周囲の人を見ても、秋田ダサイと思う風潮があった。自分が秋田の魅力を知ったのは大学に入ってから。ダサイと思って秋田を出てしまってからでは遅い。小中高生のうちに秋田好きになってほしい。

(D氏)

教育と言う視点で。自分は農業高校で農業を学んで、県立大学でアグリビジネスを学んでいる。農業高校に在籍していても農業をする子はいないのが現状。そして、少子化で学校統合が進み、農業高校がなくなる風潮になっている。

秋田県は農業が主要な産業だと思っているが、過去の減反政策もありピックアップされていない気がする。農業は誰かがやるからいいでしょうと思っているのではないか。でも、秋田県で農業を頑張っている女性達がいる。一次産業を守っていくスタンスが、学生、大学、各団体にあればと思っている。

それには、農業に触れる機会を多くすべきでないか。大人のグリーンツーリズムはあるが、平日開催で学生が参加しづらい日程で残念である。小中高の学習の中で、農業に触れる事業を県で展開してみてもどうか。大人向けだけでなく、将来地域を守っていく若者への支援が必要だと思う。また、感情豊かな小中の時に、県外からインターンを受け入れるものがあればいいと思う。

(H氏)

教育の中の農業は重要。秋田県の小中生は全員農業体験すべき。自分は今日、県庁に来る前に潟上市で田んぼの草刈りをしてきた。裸足で田んぼに入る作業を通じて、農業は日本の根幹だと思った。農業の歴史、田んぼの生物、農業の言葉等、全て学校で学んだ事がつまっている。全国学力テストの結果で満足するのではなく、自分の手足で感じ、身体感覚で身につく学習が重要だと思う。それは東京では体験できない事である。

(A氏)

東京出身として思うのだが、秋田にはせっかくフィールドワークできる環境があるのだから活用しない手はないと思う。灘高校の名物教師が、一冊の本を1年間体験を通して学ぶというのをテレビで見た。秋田県もそれが出来ると思うので、初等教育において、県内にある資源を使って体験を伴った学習を促進すれば、子供達にもっと農業に関心を持ってもらえると思う。それが秋田県のアドバンテージであり、東京出身者としてうらやましいと思う。

(F氏)

自分は、中高で秋田について学んだが、課題があると知ったからこそ秋田に興味を持った。「秋田は凄い」のメッセージだけでなく、課題がある事を伝えるのも大切。自分は課題があるから秋田の事を考える様になった。小中の時に「秋田凄いや」とすり込んでも、高校生で進路を考える時に、秋田はやばいと気づき出て行く可能性もある。もう一つの方向性として、小中から秋田の現状を知る事も大切だと思う。

(I氏)

本当のふるさと教育が必要だと思う。自分の住んでいる所の地域資源をどう活用して、地域をよくしていくのかと課題を与える。今ある既存の資源から何を生み出すか、そういう教育を行えば、一端県外に出ても、スキルを身につけてから秋田に戻って、課題解決のために取り組む、そういう人材が増えると思う。

観光についてだが、今の観光は点と点である。観光は観光地に行く過程が楽しみだと思う。それには、地域性や多様性を盛り込んだ観光のシステムを作らなくてはと思う。その時、いかに地域住民に、地域の財産にはこんなものがあると気づいてもらう事も必要。

(A氏)

Eさんが言った「秋田ダサイ」は、秋田にないものを見るから。Fさんの「秋田凄いや」だけじゃいけないと言う話で、秋田にあって東京にないもの、資源に気づき、それをどう活かしていくのかにシフトしていく。信じ込ませるものでなくどう活かせるかという視点まで持っていけばいいと思う。

(C氏)

県外出身者としての意見だが、秋田に来たばかりの頃「秋田は何もない」と皆が言っていて驚いた。でも、お酒が入ると、皆、地元大好きなんだと伝わってくる。東北は祭が目玉、地元の宮崎は特にないので東北の祭は憧れである。県外の学生限定の祭りツアーを実施し、地域にホームステイしながら秋田を体験するツアーがあればいいのではないか。

(A氏)

そういうツアーを組む時に必要なのは、観光だけでなく、地域でのホームステイ等文化に触れてもらう事、祭だけじゃない裏にあるものを大切にすべき。祭りが好きだから、そこに住むのではなく、地元で根付いた文化が好きだから住むのだと思う。自分も復興支援で古民家に泊まったのはいい体験だった。

(G氏)

自分は教育課程で将来教員を目指している。地域に根ざした教育を教師が意識するのが大切だと思っている。教師は教科書を見ながらやるべき事をやるだけでなく、自分は社会教育を学校教育に入れたいと考えている。小学校を中心に置いた地域コミュニティの形成。学教教育だけでなく、違う視点を入れた教育をやりたいと考えている。

(A氏)

教育の事で言いたいのは、Bさんが言っていた初等教育を充実させると言う事と、県外から来た学生を活用して活性化させると言う事をつなげる話である。御所野プロジェクトとして、国際教養大生が御所野中学に英語を教えに行っている。中高生にとっては県内大学の魅力を知る事になるし、他の大学も初等教育とのつながりを持たせたいと思う。

(D氏)

小学校の時、学校に小さい畑があり、地域の人が農業を教えてに来てくれた。高校に入ってから、小学生とつながり、田植えやリンゴの収穫を行った。今は農業に触れた事のない子供も多い。農業があるから家と家が結びつく。「結」が今は薄れてきていると感じている。子供の心に刺激を与えて、秋田が好きという気持ちが育つ。農業教育、実体験が、地域で何かしようとする人につながる人に触れる機会があればいいと思う。

(B氏)

勉強も出来て、創造力も豊かな秋田の優秀な子供が外に出ていく現実。皆さんは大学を出て、秋田でスキルや知識を生かせる仕事、秋田に引き留めるものは何だと思うか。

(H氏)

いかに流出させないかと考えるだろうが、別に防がなくていいと思う。一回秋田から出る経験も必要。自分も韓国に留学して、外から秋田を見る経験をしてよかったと思う。30歳位にパワーアップして秋田に戻って来ればいい。受け皿としては、五城目町の様な自由度の高いプロジェクト。五城目には日本全国から集まってきている。これを秋田県全体で出来れば面白い人が戻ってくると思う。

(A氏)

起業家プログラム、課題がわかっている自分のスキルで課題解決しようとなる、秋田の良さと共に課題を認識する事が重要。

(E氏)

小学生の時、ふるさと教育で石川理紀之助について学んだが、難しく興味を持てなかった。小学生に難しい事を難しく教えては駄目。

(I氏)

自分は鉱物が好きで、小さい頃から地元の資源をわかっていたから秋田大学に入学した。教科書の内容を地元の資源とリンクして興味を持たせるのが大切でないか。

(C氏)

新屋には空き家がたくさんあり、美大生は空き家をアトリエとして月2万5千円で借りて活動している。地域の子供達に開放し、画材を与えて一緒に遊ぶ事もしているが、経営が苦しくなり終了する予定。秋田には空き家バンクの制度があるのに、秋田市では登録一件のみだった。空き家はいっぱいあるはずなのに、利用しない人が多いのは残念。

(H氏)

秋田は資源があるのに発信が下手過ぎる。これから人口減少でパイの奪い合いだから、情報発信に本気で取り組んでいかないといけないと思う。

(B氏)

秋田は教育を売りにするべきである。田んぼに入る事も含め、更に磨きをかけつつ、秋田はいい子に育つという事を、秋田で子育てしたい親に向けて発信する。テストの点数が高いのはもうわかっているので、それに体験的な教育も充実している事を加えていくべき。

(A氏)

秋田は教育を売りにするべきである。田んぼの体験も大切。国際教養大学との連携や、テスト1位はなぜなのか、もっと発信すべき。大学の連携について具体的にイメージが湧けば行ってみたいと思う。データの裏付け、証拠が必要。

(I氏)

行政、NPO等との協働の選択肢に学生団体も入れてくれたらと思う。新たな力を手に入れられると思う。

(G氏)

多くの人に学生団体を知ってほしい。秋田の良さを活かしつつ、更にいい秋田を作っていきたい。学生団体はその一翼を担うと思っている。

(C氏)

美大の「ももさだ」は登録文化財になっている。残すべき素晴らしい建物だとは理解しているが、使用制限が厳しく「汚してはいけない」と言われる。もう少し寛容なら活動の幅が広がるのにと残念である。

(D氏)

県立大生は地域に出る人が少ないので、今日はいい時間だった。自分の団体がいいと思っているだろうが、団体内で完結でなく、学校同士、団体同士でマッチング出来る事はないのだろうか。学生の意識もどうか。一緒に活動出来ればと考えている。

(G氏)

アークの代表になって「アトムとの違いは」とよく聞かれる。お互い秋田の事を考えて活動しているし、やっている事は近いので、交流していければと思う。

(E氏)

過疎地域に行く機会が多いが、地域ではバス停が遠くてそこまでも行けない等不満を持っている人がいる。若い人が県やJRとの中に間に入る事で変わるのではないかと思っている。学生が行って不満を聞く事で、違うアプローチや提案が出来る。「やんぐびじょん」で行ってみて全然違うと思った。

(I氏)

「やんぐびじょん」マッチングの一回目に行き、地域団体が多いと思った。これからは自治会レベルとマッチングしていきたい。レベルを上げて学生を受け入れてくれればお互い波及効果が生まれると思う。

(副知事総括)

小中高の教育のあり方、自治体の取組等について、貴重な意見をいただいた。

自分が子供の頃は大半が農家。農業が忙しい時期は学校が休みで、小学生も農業を手伝っていた。本物のふるさと教育を充実させるべきだと思った。

確かに今、学力、体力、特徴ある大学、教育県として全国的な評価を得ている。それを、もっと進化させていき、なお一段と教育県としての情報を発信が出来るのではないかと考える。一層、教育県として全国にアピールして、それが秋田への交流の拡大に直接寄与出来る取組を行いたいと思う。

秋田南高が中高一貫校になるので、県外枠を作ると中高でも県外から人が来ると思う。この4月には、東北で初めて林業大学校もでき、いろいろな分野で人材養成に力を入れている県だという事を、地方創生の大きな特徴にしていきたいと思っている。

資源はあるが発信が弱いと言う指摘は、力不足だと感じている。どういうものを発信するか、まずは教育が大事。また、皆さんが地域に入って我々が気付かない資源、宝物を見つけていただき、これからの新しい地域の特徴として情報発信していきたい。そういう視点での取組を大事にしていきたい。

地域おこし協力隊で取り組んでいる五城目町の成果。全国から新鮮な発想をもって、それぞれの地域で励ましてもらいながら色々な事業を行っている。それは観光、産業、いろいろな面で成果が出ている。

地域の協働を担う母体として、NPOやボランティアがあるが、学生団体も入ってほしい。全国的にもそうした活動を展開して商品を作ったり観光をやってもらっている例がある。とりわけ人口減少が進む中で学生の力は大きいので、しっかりと位置づけて、頑張ってもらえる環境づくりを我々も頑張らなくてはと思う。

活動する際に、公共交通機関を利用しやすくする制度について、具体的な提案をいただいたので、我々もしっかりと考えたい。

学生が祭やホームステイに参加し交流の場を拡大する事は、教育旅行や留学として、商品企画ができそうな気がする。旅行会社や教育委員会が知恵を出し合えば面白いものができるのではないかと思う。

大学と小中高が連携し、皆さんと地域との連携が深まり、歯車がかみ合えば地域の人
も元気になり、秋田県全体が面白くなると思う。皆さんの活動は大きな可能性を持って
いるので、私の期待を受け止めながら展開していただきたいと願っている。

具体的な提案は、責任をもって消化させたい。

(終了)